
眠れぬ旅路のお姫様

椎名 瑞夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠れぬ旅路のお姫様

【Nコード】

N3640I

【作者名】

椎名 瑞夏

【あらすじ】

生まれた瞬間、悪しき魔女に死の呪いを掛けられた姫だったが、世にもお人好しな魔女のおかげで、代わりに百年眠り続けることになる。

王子の口付けで目覚める、そう魔女には告げられたはずなのに、目覚めた部屋には王子はいなかった。

おまけに、王子は行方不明に・・・？

毒舌な従者と、お人好しな魔女、お調子者な村人、そして眠り姫の四人は、城に掛かった眠りの魔法を解くために、放浪王子を探す旅

— 0NFFT

序章 　　く目覚めた姫と眠れぬ従者く

百年間、姫は城と共に眠りに就くでしょう。

勇氣ある王子の口付けを受け、彼女は目覚めるのです。

その瞬間、全ての魔法は解け、城には花が咲き誇り小鳥は歌いだします。

美しい姫は、王子と結婚し幸せな日々を送るでしょう。

誰もが夢見る夢物語。

それが、ハッピーエンドというものなのです。

そうと決まっているのです。

なんで・・・？

見上げた天井には、見慣れたシャンデリア。

柔らかな月の光も、輝く星たちも。

永遠と思えるほど長い時の中で、いつも夢見ていた光景そのままだ。ただ、決定的に足りないものが、ひとつだけあった。

眠りに就く前、魔女と交わした約束は。

「そなたが目覚めるのは、隣国サバリンの王子の口付けを受けたその時じゃ」

確かに彼女はそう言っていた。

それなのに・・・。

「王子はどこよー!？」
がばっ。

音が聞こえそうなくらい勢いよく、眠り姫は上半身を起こした。

拍子に、秋の稲穂のような黄金の髪が細い肩を波打つ。

昔から、髪的美しさこそが王家の誇りだと豪語していただけあって、その輝きは部屋に差し込む月明かりよりも眩い。

形の良い眉の間にくつきりと皺を刻み、姫はいらいらとご自慢の髪を掻きまわった。

「あんのすつとぼけ魔女がっ！脳みそ腐ってんじゃないの!?!」

小さく膨れた桜桃色の唇から、躊躇い無く罵声の言葉を吐き出すと、姫は激しく頭を振った。

「ああつ。でもでもでも！王子が来るまでちよこつと待てばいいのよね？んで、ぶちゅーっとキスでも何でも交わしてやれば、万事解決なのよね？」

独り言にしては大きすぎる声で自分自身を納得させると、姫はうんうんと頷き、何の気なしにテレビのリモコンを手に取った。

そう、本当に何の気なしだったのだ。

リモコンのスイッチを押したのも、ニュースチャンネルを選んだのも。

部屋の片隅に置かれた大きなテレビから流れ出るアナウンサーの声に、姫はペリドット色の目を見開いた。

ああ。

何たる悲劇であろうか。

その瞬間、姫はまだ見ぬ王子に自分の持てる限りの罵詈雑言を浴びせかけた。

『あの大国サバリンの王子であられる、マナフェリオ様が数ヶ月前に出掛けたきり、行方が不明になった模様です。サバリンは死力を尽くして捜索に当たっているようですが、未だ見つからず、捜査は難航しそうです』

ぶるぶると震えだした拳を、手のひらに傷がつくほど強く握り締め、姫は唇を噛んだ。

白い肌が、怒りと困惑によって朱に染まっていく。

「どうしろって言うのよ！このわたくしに、どうしろと言うのよおっ」

それはまるで獣の咆哮のようだと、これを聞いた百人が百人、言うだろう。

それほど凄まじかったのだ。
黄金の巻き毛を、ライオンのたてがみのごとく振りかざした眠り姫、
ヴィヴィアの怒りは。

それは、百年前の今頃の話。

本当に良いのか、と人の良い魔女は再度確認した。
それでも、魔女の目の前に立つ少年の意思が変わることは無かった。
こくりと神妙な顔つきで頷くと、少年は薄く微笑んだ。

「彼女の愛したこの城を、彼女が目覚めるその日まで、このままで
残してあげたいのです。荒廃したこの城を見て、落胆するあの方な
ど、見たくはありませんから」

百年の間、たった一人でいることは、計り知れないほどに辛いこと
なのだろう。

それでも、決心が揺らぐことはない。
そうか、と小さく魔女は呟き闇色をしたローブの中から小瓶を取り
出した。

孤独を表したような色の液体の入ったその小瓶を、魔女は少年に手
渡す。

「後悔はしないのじゃな。・・・その薬を飲めばよい。そなただけ
は、眠りに就くことはない」

ちらりと、少年は小瓶を覗き込むと、まるで栄養ドリンクか何かの
ように、一気に飲み干してしまった。

呆れたように苦笑して、魔女は空になった小瓶を受け取る。

「たいした度胸じゃ。妾が本物の薬を渡すかどうかも分からぬのに」

「あんたは、毒を渡すような奴じゃない」

何故か自信たっぷりな少年は言い切る。

その疑いの無さにしばし呆気に取られていた魔女だったが、少年の空色の瞳を一度だけ覗き、フードを翻した。
そのフードがはためくころには魔女の姿は無く、その場には眠り姫の忠実な従者エレだけが立っていた。

序章 　　く目覚めた姫と眠れぬ従者く（後書き）

えっと、初めて投稿したのでドキドキです！

まず、この話を読んでくださった方、本当にありがとうございます。
文もつたなく、まだまだ未熟な作品ですが、続きも読んでくださっ
たらなあ、と思います。

基本的に、このお話はファンタジーなラブコメのつもりです。

一見今のところ忠実に見える従者君ですが、それは今だけです。
悪態もつくし、毒舌も吐く。

姫との掛け合いをなるべく面白く書けるようにがんばります！
それでは、さようなら。

一章 く再会は突然に

困った。

眠り姫ことヴィヴィアは、人生最大の困難に出くわしていた。

ふむ、と二三度頷きながら、あつちへうろつろこつちへうろつろ。

十分間ほど、そんな意味の無い行動を繰り返していた彼女だったが、ついに声を上げた。

「私の服は、^{わたくし}いったいどこなのよ！」

そう、一国の王女であるヴィヴィアは生まれてこのかた、一度も自分で着替えをしたことなど無かった。

ドレス、と一言発すれば何人も侍女達が髪から何から、完璧に仕上げてくれていたのだ。

自分で服を選ぶことも無かったし、増してや自分で服を脱ぐなど言語道断だ。

今現在も、こうして服を探すことに多少なりとも不満を感じてはいるが、流石に居もしない侍女を呼びつけるほど、ヴィヴィアも世間知らずではない。

「あああつ。もう！ドレスの一着くらい常備しておいてほしいわ！」
がしゃがしゃと乱雑にヴィヴィアは、黄金の髪を掻き毟り、大袈裟なほどにため息をついた。

辺りを再度確認してみても、やはりここにお目当てのものはないと悟る。

きゅっ、と唇を引き結び、ヴィヴィアは拳を握り締めた。

「……っ。仕方ないじゃない。自分でどうにかするしかないんでしょう？」

自分自身に言い訳をするように、ヴィヴィアは呟き、ドアノブに手を掛けた。

キィとドアの軋む音と共に、心の中で涙を飲む。

ああ。

まさかこの私が、ネグリジエ姿で部屋から出るなんて・・・っ。

キイ。

それは、おおよそ百年ぶりに聞いた、自分以外が立てた物音だった。黒髪の少年エレは、手にしていた分厚い本から目を離し、はっと顔を上げた。

端正な顔に、疑問の色を浮かばせる。

「空耳か・・・？」

ぽつりと囁き、本に視線を戻す。

本には、先程と変わらず小さな字が並べられていたが、エレの頭に内容は入ってこない。

ずらずらと連なった文字の音だけが脳内を徘徊するだけだ。

暫くの間、そんな意味のない読書を続けていたエレだったが、ふいに椅子から腰を浮かせた。

集中できない。

一つのことになると、他のことが手につかなくなる。

エレは典型的な一点集中型だ。

面倒くさい性格だな、等と思いつながらエレは耳を澄ました。

空気の動くその音すら聞き逃さぬように、身じろぎひとつしない。

自分の鼓動の音すら鬱陶しいと、眉をひそめる。

ペタンペタン、パタパタ。

幽霊、にしては足音が可愛らしすぎる。

忙しなく廊下を行き来するように幾度も響いてくる足音は、裸足なのだろうか。

出て行くかエレが迷っていると、そのうちに足音は彼が忠誠を誓った相手、王女の部屋へと消えていった。

「っ！」

小さく息を呑むと、エレは全力で駆け出した。

椅子に立て掛けてある、銀に輝く剣を引っつかみ、ついでに椅子を蹴飛ばした。

ガコツ。

ずいぶん痛そうな音がした。

もちろん、そんなことは気にも留めず、エレは激しくドアを開け放ち、廊下に飛び出す。

後ろの方で、本が盛大に音を立てて落下したが、構ってはいられない。

あの方の安否に比べたら、本など心を掠めすらしめない。

王女の部屋のドアを、押し破るようには開け、エレは周りを見ることも無く剣を振り回しながら、静かに呟いた。

「ヴィヴィア様の寢所に忍び込むとは、いい度胸だな」

「ふえ？」

「・・・へ」

なんとも間抜けなその返答。

部屋の中にいた人物は、小さな顔いっぱいには驚きを浮かべた。

未だ剣を降ろさず、ぽかんとしているエレに向かって声を上げる。

「あなた・・・っ。もしかしてエレエツ!？」

黄金の髪が、声と共にふわりと揺れる。

見覚えのある顔、聞き覚えのある声。

ごくん、とエレは唾を飲み込んだ。

「ヴィ、ヴィヴィア様？」

それが、眠り姫とその忠誠なる従者の、およそ百年ぶりの再会だった。

一章 く再会は突然にく（後書き）

眠り姫シリーズ第二話です。

やっとこれで次の章から、独り言ではなく、会話らしい会話が出来そうです。

この時点ではエレ君、目茶目茶いい人に見えてますよね・・・。

ああ、本性がそろそろ見えてくるはずです。

話は変わりますが、もしこの作品を見てくださった方がいらっしやいましたら、是非是非感想お待ちしています！
ていうか、書いてください！
お願いします！

これからも頑張ります。

二章 く星夜に二人は語り合う

「ずずず……」。

紅茶をすすする音が部屋中に響き渡った。

数分前に再会した二人は、丸いテーブルに向かい合い、言葉を交わすことなくお茶を飲んでいた。

「ヴィヴィア様……」

小さく、エレが目の前にいる主君の名を呼んだ。

「……」

返事は返って来ることも無く、ヴィヴィアはただじつとりとエレをペリドット色の瞳で睨むだけだ。

ず、とまた一口ヴィヴィアは紅茶を口に含み、あからさまにため息をついた。

「ヴィヴィア様。……本当にすみませんでしたっば」

「……何のこと？」

抑揚のない声に、エレは苦笑する。

先ほどからずっとこの調子だ。

感動の再会のはずなのに、あるうことが不審人物と勘違いされ剣を向けられたことを未だに根に持っているのか、ヴィヴィアはエレの謝罪をことごとく冷たい視線、あるいは冷たい言葉で跳ね除ける。

「別に気にしてないわよ。百年ぶりの再会だったのに、剣を振り回されたことなんて。これ……っぽつちも、気にしてませんからおまけに、時折思いついたように嫌味を言ってくる。

そんなヴィヴィアに、元は自分の責任なのだからと下手に出ていたエレだったが、そろそろ我慢も限界のようだった。

「そうですね。それは良かった。俺は、不審者と間違えてしまうほど仕草の庶民的な主君は持つていても、一度の失敗をぐちぐち言うてくるような主君を持つたつもりはありませんから」

「……」と、あくまで穏やかにエレは言うつと、ちらりとヴィヴィア

を見やった。

案の定、思いがけない反論にヴィヴィアは怯み、口をぱくぱくさせている。

彼女の言葉が続かないのをいいことに、エレは尚も続けた。

「そついえばヴィヴィア様、ネグリジエ姿とはなんとも大胆ですね。寝る子は育つといいますが、どうやら只の迷信だったようですね」

「な……！」

言葉のカウンターに、ヴィヴィアは二の句が告げない。

ひくりと頬を引きつらせながら、ヴィヴィアは言った。

「百年経つても、あんたの毒舌は治らなかつたのね」

「お褒めに預かり光栄ですね」

「誰が褒めたのよ！誰がっ」

「そんなことよりもヴィヴィア様」

「そんなことよりも、つてあんた……」

思わずヴィヴィアは拳を握り締める。

明らかに怒りを見せているヴィヴィアを、エレは気に留めることなく、急に真顔になると紅茶を一口飲んだ。

「単刀直入に言います。王子はどこですか？」

本当に真面目な話に、ヴィヴィアは一瞬きよんとしたが、すぐに眉宇をひそめた。

椅子の背もたれに華奢な背中を預けると、苛だたしげに言った。

「知らないわよ。こつちが聞きたいくらいだわ。つたく、あの落ちこぼれ魔女、魔法失敗しやがったのね。陰気くさいフードの所為で、頭の中に茸でも生えたんじゃないの？」

流暢な発音からは信じられない悪態をつき、ヴィヴィアは鼻を鳴らす。

「ということは、王子はいないのですね」

「……何度も言わせないでよね」

「そつですか……」

ほんの数瞬、エレの顔に安堵の色が浮かんだことに、ヴィヴィアは

気づかなかつた。

ヴィヴィアはがたがたと椅子を揺らし、足をばたつかせる。

「あゝ！それよりもさ、エレ私のドレスはどこ？いい加減に着替えたいんだけど」

「俺としては、そのままでも・・・うぶっ」

丸いクツションが見事にエレの顔にクリーンヒット。

最後まで言い終わらぬうちにエレは、うめいた。

ヴィヴィアは顔を微かに紅潮させて叫んだ。

「~~~~っ余計なこと言つてないで、さっさと持つてきなさいっ！」

魔女は、膨大なる魔力と引き換えに人としての心を売るといふ。

かの大国の王女に死の呪いを掛けたのも魔女で。

その王女を救つたのも魔女だ。

どうして救つたか？

答えは単純明快ただひとつ。

彼女が、極度のお人好しだったからだ。

魔女としては致命的なほどお人よしの彼女は、魔力さえ足りれば、眠りといわず死の呪いを完全に消し去ることさえしたであろう。

たとえ、その所為で呪いを掛けた魔女に恨まれることになつたとしても、だ。

その魔女の名は・・・。

「あーあ。あの陰気臭いフードと、まあーた対面しなくちゃなんないのか」

「ヴィヴィア様、彼女だつて好きでフードを被っているわけではないでしょう」

ヴィヴィアの呟きに、隣を歩くエレは苦笑を返した。

朝を待ち、城を出た二人は魔女の屋敷を目指して歩いていた。

馬を使いたかつたところなのだが、あいにくポニーから子豚まで、

ぐっすりとお休み中だった。

「大体あいつがへっぽこだからこんなことになっちゃったのに、なんで私が自ら出向いてやんなくちゃいけないの？」

先刻から、ヴィヴィアはずっとこの調子だった。

面会を頼んだは良いが、手が空けられないから家に来てほしいと頼まれたのだ。

それが気に入らないらしく、ヴィヴィアは機嫌を崩している。

「まあ、あと少しですから。着いたら腹いせに目一杯あの魔女を苛めてやりましょう。あ、俺痺れ薬持ってますよ。・・・試作段階なので、安全とは言い切れませんが」

腹黒い笑みを浮かべて、エレは恐ろしいことを言う。

エレの言葉に、少しだけ頭が冷えたヴィヴィアは、そうね、考えとくわと曖昧に言葉を濁しただけだった。

「ところでさあ、もちつと動きやすいドレスは無かったわけ？」

ずるずると重たげなベルベットの生地を引きずりながら、ヴィヴィアは顔をしかめた。

なにも、ベルベットじゃなくていいのに・・・。

生地そのものが重い上に、草むらを通るものだから、朝露が滲みてなお更重い。

いっそ一思いにドレスを短く引き裂いてやろうかという衝動に駆られつつも、真横に立つ、汗ひとつ掻いていない従者に生足など晒したくはない。

ヴィヴィアの妙なプライドの高さのおかげで、ドレスはひとまず命拾いをした。

だからといって、ヴィヴィアの機嫌が直るはずも無く、彼女はがじりと爪を噛んだ。

「もっつ、いやっ！歩きたくない！」

駄々をこねだしたかと思うと、ヴィヴィアは立ち止まり、肩に波打つ髪を乱暴に払った。

王家特有の気丈の高さをぞんぶんに発揮しながら、ヴィヴィアは高

飛車に言い放った。

「命令よ、エレ。今すぐ私をあゝの魔女の所まで連れて行きなさい」

「・・・はあ」

「なっ、なによ！その馬鹿を見るような目つきは！こら、エレ！」
呆れかえった様なエレの表情に、ヴィヴィアは躍起になって拳を振る。

「・・・かしこまりました。そろそろ迎えに来てもらいましょうか」
「誰によ？」

ヴィヴィアの問いには答えず、エレは不敵に薄い唇を上げた。

「ホヅミ・グリアラ・デイシア・・・」

おもむろに、彼は何事かを呟きだす。

ヴィヴィアが首を傾げるその前に、彼の声は途切れた。

否、掻き消えた。

突如、ゴウツと凄まじい音が辺りに轟き、同時に竜巻を思わせるほどの風が巻き起こった。

「な、なに・・・よ・・・これ・・・！」

ヴィヴィアの叫び声すら、響く轟音にもみ消される。

舞い上がる髪を押さえながら、ヴィヴィアは体を持っていかれないように地面にしゃがみこんだ。

同様にしてしゃがみこんだエレを覗き込むようにして、ヴィヴィアは尋ねた。

「なんなの！？」

それに答える必要は無かった。

数秒の後、地面に大きな影を作り、それは姿を現した。

「相変わらず、狡猾い奴じゃのう、・・・エレ」

それが、かの大国を中途半端に救ったお人好し魔女、ホヅミの第一声だった。

二章 く星夜に二人は語り合おう（後書き）

かっこいいサブタイトルです。

内容それに伴わず・・・っ。

くっっ。

なんですか、このあほ展開は！

自分が情けないです！

ヴィヴィアの我侷っぷりに、嫌気が差します。

もうそんな奴捨てちまえ、エレ！

こんな駄文でも読んでくださった心の広い方々。

本当にありがとうございます。

これからも頑張りますので、もしよろしければ感想等心よりお待ちしております。

瑞夏

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3640i/>

眠れぬ旅路のお姫様

2010年10月9日01時47分発行